

近代の肖像

危機を拓く

第522回

思想の変遷



谷本富 (1867~1946)

広島大学大学院准教授

衛藤 吉則

明治期から大正・昭和 元とつ・よしのり氏
初期にかけてわが国の教育界を主導した人物と
して谷本富の名をあげる

谷本富は慶應義塾大学で文学部を卒業し、その後、上京し、中村正直が創設した家塾同人社で英学を修めている。このうち、彼は、東京帝国大学文科大学専攻科として入学を果たし哲学を専攻する。

近代日本の教育学界主導

ハラスケネヒトの来校に伴い新設された教育学科の特約生となり、彼のもっともヘルバルト教授法を学ばせられた。これは、谷本が明治23年に、山口県秋出身の子爵川弥二郎に請わ

谷本 富 ①

る。これは、谷本が明治23年に、山口県秋出身の子爵川弥二郎に請わ

ヘルバルトから新教育、実験尊重へ

ま、彼の思想を再構成してみたい。

学研究科博士課程後期教育過程—谷本の「宗教教育専攻単位修得退学」の時期は、明治23年現在、同大学大学院文学研究科准教授。専門は教育哲学、応用倫理学。論文に「谷本富におけるシユタイナー教育の受容」など。

この時期は、明治23年の大川周明の国家改造思想にみるシユタイナー思想と「谷本富におけるシユタイナー教育の受容」の関係、共著に「仙厓」

の谷本の事績について、京高等師範学校教授(東京教育博物館主事、文部省視学官兼務)となり、教育と哲学を担う者として、治20年代をさして、確固たる地位が築かれて

の代表的な推挙者が谷本であり、当時の彼の功績により、「ヘルバルト派」として活躍する明治末から大正初年をさして、この時期、谷本にいち早く新教育の影響を受け、個人主義的な要素を文科大学とその教育学

の代表的な推挙者が谷本であり、当時の彼の功績により、「ヘルバルト派」として活躍する明治末から大正初年をさして、この時期、谷本にいち早く新教育の影響を受け、個人主義的な要素を文科大学とその教育学

の代表的な推挙者が谷本であり、当時の彼の功績により、「ヘルバルト派」として活躍する明治末から大正初年をさして、この時期、谷本にいち早く新教育の影響を受け、個人主義的な要素を文科大学とその教育学

近代の肖像

危機を拓く

第523回

宗教と教育

谷本の記述によれば、前号で示した事績に関する4区分の他に、「米國の常識的教育学」や「英國流のスペンサーやペーン一流の科学的主義の教育説」に心酔した東京帝大時代と、大正末から最晩年にかけて自らの教育思想の完成をめ

谷本 富 ②

「支那古宗教論」(哲学を例に挙げ学生たちに説

広島大学大学院准教授

衛藤 吉則

この観点に貫かれている「ごり生えたのであろう」ことが判明する。それが「日本の教育学としての宗教教育」であり、第5期に至ってその理念が結実する。現在、世界的な注目を集め、筆者が研究の対象としている

日本固有の教育学確立を目指す

シユタイナー教育もまた、教育史上看過されてきた彼の第5期において言及されることとなる。では、谷本における「宗教」への関心はいつから培われた宗教的精神感情が必須であるか、神は、論文上では、東京帝大在学中に著された「支那古宗教論」(哲学を例に挙げ学生たちに説

留学後、宗教教育を自己の基底にすえる

39年)として著され、そこにおいて、「明治維新

シユタイナーの思想をはじめ多角的に宗教教育を考察した論文(本紙昭和29年5月31日~6月7日付)

宗教教育の本領

谷本富の「宗教教育の本領」(本紙昭和29年5月31日~6月7日付)は、シユタイナーの思想をはじめ多角的に宗教教育を考察した論文(本紙昭和29年5月31日~6月7日付)の要約である。谷本富は、シユタイナーの思想をはじめ多角的に宗教教育を考察した論文(本紙昭和29年5月31日~6月7日付)の要約である。

以来わが帝国の教育は漸々教育と宗教と云ふものを分離する方針を取って参つて、今日ではほとんど教育と宗教と云ふものは全く別のものに成つてしまつた」と批判的に振り返り、教育に宗教的基礎を与えるべきことを明示し始めるのである。こうした主張は、その続刊に位置づけられる『系統的新教育学綱要』(明治40年)においてもなされ、「吾々の新教育に於いては、ドゥワシでも宗教と相提携しなければならぬ」と、谷本の宗教教育論の要諦が述べられて

近代の肖像

危機を拓く
第524回

広島大学大学院准教授

衛藤 吉則

よりよく生きる

谷本は、明治末年以降、講演や講義で宗教教育を通じ、谷本は宗教教育をとりあげつつ、その理論化を本格的に進めていくことになる。具体的には、明治39年の京都中

を含んでいた。つまり、ここにおいては、徹底した観察・内省・体験に基づき現象の本質が考究され、そこで得られた内観的な理解の程度に応じて真善美が個別に体现されていくと考えられたのである。

人智学に教育の理想発見

それゆえ、この教育は、理性的な認知的アプローチに加え、非理性的な感情や意志や身体、それにモラルをも含めたホリスティックな能力の育成が課題とされる。谷本

谷本による宗教教育の構

つづく第4期において、谷本は、先の諸説の欠陥を克服すべく、経験概念を基盤に「潜在意識的



人智学の創始者ルドルフ・シュタイナー (1861~1925)

したシュライエルマッハ、ならびに人格教育学を唱えたオイケン等に向かう。

しかし、谷本によれば、それらの思想には共通して、現実の諸個人が普遍的な「超感的世界」(絶対者、神)に付属する」という、普遍優越の構図がみとれるという。

「我」と普遍との合一を説くW・ジェイムズのプラクティズムや、生的事象の非線形的全体性、時間不可逆的な質的推移、現象の長期予測の不可能性を理論的に説明可能とみるヘルクソンの創造的進化論に傾倒し、そこに自己の「宗教」概念を重ねみよとした。しかし、谷本にとつて、実存の根源性との関係を含まない、真理への生活有用性基準(ジェイムズ)や流動性概念(ヘルクソン)においては、個人の深い感情的信念に貫かれた人格的変容を説明できないものと解された。

谷本 富

③

独・神秘思想家シュタイナーが創始

「愛力具備したる活ける人間」と称する。以上の間心性の精緻な構造理解

第5期に、自らの宗教的

精神科学的教育学を主導